

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2022 年 6 月 7 日 (火) 1 限 実施

第 1 回 考 査

千葉県立佐倉高等学校 第 3 学年 A～G 組

Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように 5 桁で記入してマークを忘れないこと。
例 3 年 D 組 1 番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第1問 神話的世界観についての問い(問1~問2)に答えよ。(配点 16)

ギリシアの宗教神話は、神々の起源に関する天地創造の物語や、[1]の最高神ゼウスを頂点とする不死の存在間の内紛の物語などから成り、宗教儀式と結びついていることもある。また、ゼウスと女神たちや人間の女性との情事の物語も含まれており、この結果として若い世代の神や英雄が誕生する。ギリシアの天地創造神話はヘシオドスの『[2]』に描かれている。ヘシオドスによれば、世界は4人の神、(a)カオス(混沌)、[3](大地)、タルタロス(暗黒界)、エロス(愛)の誕生によってつくられたという。のちに[3]からウラノス(天空)が生れ、その後[3]とウラノスの息子クロノスが息子のゼウスに追放され、ゼウスが神々の主になった。

神々に関する神話には、誕生、怪物やライバルに対する勝利、恋愛、特別な力、祭典や儀式などが描かれている。神々は幅広い力を有していることが多いので、それに応じて神話も複雑である。たとえば、美と愛の女神[4]は性愛行為の象徴ともされる。酒神[5]は狂乱、奇跡、儀式上の死まで結びつけて語られる。一方で、神々の人間的な側面を扱った物語も多い。その典型が(b)『イリアス』で描かれているゼウスと妻の[6]の夫婦げんかの描写である。人気テーマを扱った民話風の物語も、ギリシア神話に加えられている。たとえば、失踪した人間が長い冒険ののちに帰還する話とその例で、英雄オルフェウスが妻のエウリュディケを生者の世界に連れ戻すため黄泉の国に行った物語や、ヘラクレス、オデュッセウス(トロイア戦争の後の長い放浪)、テセウス(ミノタウロスを殺した英雄)の物語などがあげられる。

ギリシア神話は古代ギリシアの詩や叙事詩、戯曲の源泉となり、哲学者や歴史家にも多大な影響を与えた。ローマ人はギリシア神話をそっくりそのまま自分たちの文学に組み込み、[7]語という言葉によって、またオウィディウスの作品によって、のちに中世の想像力の源となった。さらに、後世の再評価や再解釈によって、西洋文明に比類のない大きな影響を与え、その範囲は芸術、文化の主題から科学技術の語彙にまで幅広く及んだ。

問1 文章中の空欄[1]~[7]に入る最も適当なものを、次のそれぞれの①~④のうちから一つずつ選べ。

- [1]

①	アクロポリス	②	オリンピア
③	オリュンポス	④	デルフォイ

- [2]

①	仕事と日々	②	オデュッセイア
③	神統記	④	イリアス

- [3]

①	ガイア	②	ニュクス
③	ポセイドン	④	ヘメレス

- [4]

①	アフロディテ	②	アテナ
③	ヘラ	④	エリス

第2問 次の文章を読み、下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 24）

ギリシャ哲学は、紀元前6世紀ごろ小アジア南西部海岸ぞいの植民都市 [9] に住んでいた (a)イオニア学派から始まる。彼らは、この世界を神話的に説明するという従来の方法から脱して、合理的思考によってとらえようとした。その口火をきったのがタレスである。彼は日食を予言したともいわれ、天文学や幾何学の確立に大きな功績を残したすぐれた自然研究者であったが、彼はそれだけにとどまらず、この自然全体の根本原理となるもの、つまり万物の根源としてのアルケーを原理的に探求しようとした。タレスはそれを [10] としたが、これを受けてその後、万物の根源を問う思想家がつぎつぎとあらわれ、さまざまな理論を展開した。(b)ヘラクレイトスもその一人であり、彼は「 [11] 」と唱えた。このようにギリシャ哲学は、万物の根源への問いとして、その第一歩を踏み出したのである。

また、(c)ピュタゴラス派では、万物の「成り立ち」は事物を構成する形式的な原理である数に求められる。世界は相反する諸性質の間に生まれる数的な調和（＝比例、ロゴス）である。そしてパルメニデスは、これまでの哲学者のように存在を感覚において現象するものとして把握するのをやめ、感覚的な現象の背後にその根拠として不変不動な存在が理性に対して示現していることを明らかにした。これこそが存在の真実性であり、感覚的現象は虚像にすぎない。ここに、感覚に現象する生成・消滅する事物の「成り立ち」としての (d)「自然」を求めた最初の哲学者たち、すなわち自然哲学者とよばれる人々の思索は頓挫し、哲学は新たな端緒を求める。

問1 文章中の空欄 [9] ～ [11] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[9] [① カップドキア ② エレア
 [③ ミレトス ④ トロイ

[10] [① 火 ② 水
 [③ 土 ④ 空気

[11] [① ゴーオン・ポリティコン ② ラテ・ピオーサス
 [③ グノーティ・サウトン ④ パンタ・レイ

問2 下線部(a)に関して、アナクシメネス [12] についての説明と、アナクシマンドロス [13] についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つずつ選べ。

- ① 空気であるわれわれの魂がわれわれを統率しているように、氣息（ pneuma ）すなわち空気が世界全体を取り巻いている
- ② 不生不滅の四つの元素が、「愛」と「憎」によって結合したり分離したりして、世界のいろいろな状態が現出する。
- ③ 神的で不滅なアペイロンから、まず性質の対立するものが分かれ、そして、争い合うこの対立するものから星辰や生物が生じるが、やがて死滅し、アペイロンへ戻る。
- ④ 万物のもとのもの（アルケー）はそれぞれ性質が異なる種子（スperlマタ）であって、どの種子をもっとも多く含むかによって、そのものの何であるかが決まってくる。

問3 下線部(b)に関して、ヘーゲルは著作『哲学史講義』の中で、弁証法の祖としてヘラクレイトスとエレアのゼノン、プラトンを挙げた。弁証法についての次の記述を読み、文中の空欄 [14] [15] に入る最も適当な語を、下の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

弁証法的な運動とは、あるものが最初はただ自分自身として、自分自身のなかに、いわば自分自身に即して（即自アン・ジヒ）あるが、やがてそれが必然的に自分自身にとって他者となり、自分自身に対して（対自フュール・ジヒ）あるようになる。しかしこのものは他者となりながらも依然として自分自身であるから、いったん自分がそうなった他者というあり方を廃棄（[14]）して、ふたたび自分自身のもとにもどるというプロセスであり、この最後に到達した段階が即且対自（アン・ウント・フュール・ジヒ）と呼ばれる。この運動には3つの段階があるのだが、これらに対してそれぞれ、即自・対自・即且対自とか、正・反・合とか、定立・反定立・[15] という名称が与えられて一種の論理的図式のなったものがいわゆる弁証法である。中塾肇『弁証法』

[14] ① アウフヘーベン ② テーゼ ③ アンチテーゼ ④ ジンテーゼ

[15] ① 終焉 ② 総合 ③ 結論 ④ 分析

問4 下線部(c)に関して、次のピュタゴラス派についての記述中の空欄 [16] [17] に入る語として、最も適当なものを、下の①～④のうちから一つずつ選べ。

ピタゴラス（学派）の宇宙像は、門人フィロラオスの著作にうかがえる。彼らは従来の大地の平板説をとらず球状説を採用し、天動説ではなく変則的な地動説を唱えた。彼らは [16] が完全数であり、[17] の比の数でもあり、神聖な数とみなしたが、天体の数についても、恒星球、五つの惑星球（土星、木星、火星、水星、金星）、太陽、月、地球と、対地球という天体を導入して [16] 個とした。この [16] 個は宇宙の中心にあって宇宙の活動を管理し、地球に生命を与え、一種の創造力をもつ存在の「中心火」の周りを回っている。中心火が地球から見えないのは、地球の半球面だけに人間が住み、その半球面はつねに中心火には向かないように回転している（地球の自転はない）からである。太陽はガラス状で、中心火を反射して地球に光と熱を伝え、月は太陽の光を受けて輝く。また天体の動きは巨大な [17] を生じているが、人間は生まれて以来聞き続けているので、その [17] は聞こえない、とした。この宇宙像は多くの弱点をはらんでいたが、地球が宇宙の中心の周りを惑星と同様に運行すること、地球を含むすべての天体が球形だとしたこと、惑星と恒星を区別したことなど、後世に少なからず影響を与えた。

[16] ① 7 ② 9 ③ 10 ④ 12

[17] ① 雑音 ② 結果 ③ 和音 ④ 秩序

問5 下線部(d)に関して、次のノモスとピュシスに関する記述の文中の空欄 [18] [19]、に入る最も適切な語を下の①～④のうちから一つ選べ。

パルメニデスは、それまでの自然哲学者が暗黙のうちに前提していた「感覚された事実」と「思惟された事実」を厳密に区別し、前者は人間の[18]にすぎないものであるのに対し、後者こそ「真実在」であることを「ロゴス（理性）の判定」によって証明した。[18]と「真実在」を区別し、両者を対立させる考え方は、エンペドクレス、レウキッポス、デモクリトスのような原子論者たちに継承されていく。デモクリトスの次の言葉はよく知られている。「色彩も甘い辛いもノモスの上のこと、真実には[19]と虚があるのみ。」

こうして、「感覚されたもの」(=[18])と「思惟されたもの」(=真実在)を対立させる考え方が自然哲学者のあいだに広まる一方、折からの戦争や政変、他国の文化や法律に関する知見の増大といった時代状況の中で、それまで絶対的で永遠なものとして信じて疑わなかったポリスの法や習慣や正義が人々の疑惑にさらされ、相対化されることになる。

ここに至って、パルメニデスのかの「真実在」と「[19]」との対立図式は、「ピュシス」と「ノモス」に振り分けられ、明確な概念となって人々の意識にのぼせられることになったのである。

大田孝太郎『『ノモス』と『ピュシス』——古代思想から近代思想へのその展開——』より

[18] ① 妄想 ② 現実 ③ 自然 ④ 思い込み

[19] ① イグニス ② プネウマ ③ アトマ ④ ケノン

問6 初期ギリシアの自然哲学者たちに関して、この哲学者たちの思想についての記述として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。(2003年追試) [20]

- ① 事物は神である「一者」を根源として、そこから流出によって派生的に生成したのであり、人間は実在界と感覚世界との中間に位置する。
- ② 事物は普遍的な理(ことわり)(ロゴス)に基づいて生成し、人間はこの理に従うことで情念に支配されない、理想の生き方を実現することができる。
- ③ 事物は質料に内在する固有の形相が現実化していくことによって生成するが、この世界それ自体は生成も消滅もせず、永遠に存続する。
- ④ 事物は多様な仕方で生成するが、その根源には「空気」「水」といった構成元素が、本質において変わることはない原理として存在する。

第4問 次の文章を読み、下の問い（問1～問7）に答えよ。（配点 16）

ソクラテスは書物を書かなかった。その周囲にあった何人かの人が彼について書き、われわれはこれによって彼を知るが、そのうちのだれを、また、どこまで信ずべきかという点に問題があり、これを哲学史上「ソクラテス問題」という。プラトンらの著作によると、ソクラテスが生涯アテネの人々に向かって説いたことは「ただ生きるのではなくよく生きよ」ということ、また、そのために「[25] への配慮」をおこたるなということであった。そのためには、何が善であり何が悪であるか、善美のことがらについての正しい知を必要とする。したがってソクラテスは、この知をほかのいかなる知にもまして重視した。真の知者とよべる者は、この知をもっている者でなければならなかった。

ところが、ソクラテスがアテネで知者といわれている政治家、詩人、技術者たちと問答をして気づいたことは、彼らのだれ一人として善美のことがらについては何も知っていないということ、しかも、知っていないにもかかわらず、あたかも知っているかのように思いこんでいるということであった。

ソクラテスにとってデルフォイの神殿に掲げられた「汝自身を知れ」ということこそ、すべての人々がとりくむべき第一の課題であった。ソクラテスが相手に無知を自覚させるためにとった方法が [26] である。[26] とは、まず相手に正しいと思うことをのべさせ、対話を通じてそれを吟味していく中で、相手にその考えの不十分さや誤りに気づかせ、より根本的な知に到達させる方法のことである。

問1 文章中の空欄 [25] ～ [26] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[25] ① 魂 ② 身体 ③ 霊 ④ 理性

[26] ① 問答法 ② 修辭法 ③ 批判法 ④ 逆説法

問2 対話相手に自らの無知を自覚させるためにソクラテスが用いた方法の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[27]（2012年センター本試）

- ① 相手との問答を通して、相手の考えの矛盾を明らかにするという方法
- ② 神託に謙虚に従い、魂がそなえるべき徳に関する知へ誘うという方法
- ③ 善に関する真理を教授し、知を愛することを手助けするという方法
- ④ 魂を主題とする問答を通して、互いの優れた考えを学び合うという方法

問3 ソクラテスが重視した善美のことがらを示す語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[28]

① アパテイア ② アレテー ③ カロカガティア ④ アガトン

問4 ソクラテスの考えた「真の知」についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[29]

- ① 知とは本来けっして誤ることのない絶対確実なものであるとすれば、真の知者は神のみであり、われわれ人間は何一つ確実には知らない存在であると考えた。
- ② 生涯をかけて魂の世話を続けることによって、人間は死後の世界で真の知に到達できると考えた。
- ③ 人間の魂は真の知についての記憶を持っているため、それを想起することによって真の知に到達することが出来ると考えた。
- ④ すべての知は相対的なものであるため、絶対的な知は存在せず、弁論によって真偽をあきらかにする以外に方法はないと考えた。

問5 文中のソクラテス問題についての説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[30]

- ① 書物を書かなかったソクラテスの思想を哲学的に論じる意味があるか。
- ② 書物を書かなかったソクラテスの思想をプラトンらの著作からどう復元できるか。
- ③ ソクラテスの主張はソフィストの主張と同じ内容のものではないか。
- ④ ソクラテスの裁判と処刑は後世にどのような意味を残したか。

問6 ソクラテスの考え方として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。[31]
(1995年センター本試験)

- ① 感覚が受け取った印象はそのまま知識となるので、アレテーを備えた魂が受け取る印象こそが真実の基準となる。
- ② 速く走ることが馬のアレテーであり、よく切れることがナイフのアレテーであるように、人間の魂にアレテーが備われば、よく生きることになる。
- ③ 奴隷も市民も宇宙という一つのポリスの住人として対等なので、そのよき在り方としてのアレテーは同一であり、両者を区別して扱ってはならない。
- ④ 快適なものを求め、不快なものを避けるというのは、人間の自然本性なので、快を最大限に享受する働きが魂のアレテーである。

問7 ソクラテスの死に関する記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[32]

- ① ソクラテスは、自分が死刑判決を受けることが、宇宙の理法としての運命に従うことであると考へて、死刑判決を受け入れることを選んだ。
- ② ソクラテスは、自分の哲学が否定されたことを不満に思い、アテネの民主主義を批判する意味で、死刑判決を受け入れることを選んだ。
- ③ ソクラテスは、不正を行うことによって永遠の魂を汚さないために、脱獄ではなく間違った死刑判決を受け入れることを選んだ。
- ④ ソクラテスは、いかに間違った法律であっても法律には従うということが、神のお告げであるから、死刑判決を受け入れることを選んだ。

第5問 次の文章を読み下の問い（問1～問8）に答えよ。（配点 18）

“プラトニック・ラブ”という表現や、「ヨーロッパの哲学的伝統はプラトンにつけられた一連の脚注からなっている」という、ホワイトヘッド（『過程と実在』）のよく引照される言葉にもうかがえるように、「プラトン」の名は、もはや哲学者プラトン自身から離れて、一つの象徴的な価値を持っている。

プラトン主義——それは、プラトン哲学の中核をなすいわゆる (a) イデア論 の代名詞として、哲学史においては、たとえばプロティノスに代表される新プラトン主義の中で独自の展開をみたり、近代ではドイツ観念論（とくにカント、ヘーゲル）やイギリスの観念論哲学において体系的に解釈されたりしたが、他方でそれは、たとえばイタリア・ルネサンスに見られるように〈愛〉の思想としてクローズ・アップされたり、あるいはかなり粗雑に [33] 主義、精神主義、永遠主義、普遍主義などの代名詞ともされ、文学の領域ではアメリカの超越主義やイギリスのロマン主義の思潮の中にも浸透していったものである。

ところが現代では、プラトン主義は逆に否定的な文脈で語られるのが常であり、それはニーチェによる《プラトン主義の転倒》という試みに端を発する。プラトンでは現象界は諸々の現象がイデアを「[34]」することによって（言い換えれば、イデアが現象のうちに「現前」することによって）可能になると考えられているが、真に存在するものと常に生成変化するのみでそれ自体として存在するとは言えないものとへ世界をこのように規範的に分割していく視線が、ニーチェではプラトン主義と呼ばれ、その転覆が企てられるのである。

なぜその分割は規範的なものとみなされるか。それは、真に存在する叡智界と感性的な現象界との関係が、実在と仮象、原型と模倣（オリジナルとコピー）の関係とみなされ、しかも分割の基準が前者に内在する、つまり後者が前者のうちに自らの根拠を持つと考えられているからである。したがって、《プラトン主義の転倒》は存在と生成、叡智的なものと感性的なものを逆転するだけでは完遂しない。なぜなら真なるもの／見かけだけのもの、上位／下位といった規範的ヒエラルキーの構造そのものがそこでは保存されてしまうからである。

ニーチェ以降の哲学では、こうした規範的分割と連繋している全ての概念構成、たとえば現象を超えたところに現象の根拠を設定するようなあるいは存在を同一性としてとらえ生成の非同一性をそのうちに吸収していくような (b) 形而上学的思考 が、一括してプラトニズムと呼ばれることが多い。

鷲田清一『現代思想を読む事典』

問1 文章中の空欄 [33] ～ [34] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[33] [① 現実 ② 実存
 [③ 自由 ④ 理想

[34] [① 想起 ② 抑圧
 [③ 投射 ④ 分有

問2 下線部(a)アイデアに関して、プラトンの考え方に合致するものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[35] (2010年センター本試験)

- ① アイデアは個物に内在する真の本質であり、感覚ではなく、知性だけがそれを捉えることができる。
- ② アイデアは生成消滅しない真の存在であり、感覚ではなく、知性だけがそれを捉えることができる。
- ③ アイデアは個物に内在する真の本質であり、感覚は知性の指導のもとにそれを捉えることができる。
- ④ アイデアは生成消滅しない真の存在であり、感覚は知性の指導のもとにそれを捉えることができる。

問3 文中の下線部(b)に関して、形而上学を説明する文中の空欄【A】【B】に入る最も適当な語の組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選べ。[36]

最初の形而上学者である【A】とプラトンは、外観と実体の基本的な違いを認めた。
【A】もプラトンも、変ることがないゆえに真実である観念の世界を支持して、知覚できる世界における移ろいやすくあてにならない現実を否定した。

アリストテレスはプラトンの形相と【B】の区別から始めて、生物学モデルを用いてこの2つを統合し、【B】は常に潜在的な理想形相にむかって動いている、と考えた。このようにして、物質世界は有機的な変化の連続体とみなされる。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典「形而上学」の解説

- ① A パルメニデス B 質料
- ② A パルメニデス B 実体
- ③ A ヘラクレイトス B 質料
- ④ A ヘラクレイトス B 実体

問4 プラトンのいう「愛(エロース)」の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[37] (2005年センター追試験)

- ① 個々の美しいものや善いものを超えて、善美そのものを追い求めようとする情熱のことである。
- ② 異性をひたすら精神的にのみ愛し肉体的な結びつきは徹底的に排そうとする、清浄な情熱のことである。
- ③ 精神的な価値観を共有する者に対して感じる友情のことであり、友のためには死をも辞さない心情のことである。
- ④ 究極的な一者から人間に与えられた愛のことであり、究極的な一者に全面的に帰依する心情のことである。

問5 プラトンの著作として適当でないものを、下の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。[38]

- ① 形而上学 ② ソクラテスの弁明 ③ クリトン ④ 饗宴

問6 文中の【A】・【B】に入れるのに最も適当な組合せを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

[39]

彼は、人間の魂を理性・気概・欲望の三部分にわけて考え、理性は知恵という徳を、気概と欲望は理性の指導のもとにそれぞれ【A】、節制の徳をもつと考えた。そして、それぞれの部分がみずからの徳を実現するとき、魂は全体として調和を保ち、正義の徳が成り立つとした。また、よく生きるには、個人が魂を正しく秩序づけるだけでなく、個人が形成する国家の全体も、正しく秩序づけられる必要があると考えた。すなわち、国家を構成する統治者階級、防衛者階級、【B】階級が、それぞれの本分をはたして魂の三部分に相当する徳を発揮するとき、国家全体に正義が実現されるとした。したがって、知恵にすぐれた哲学者（愛知者）が政治をおこなう哲人政治によって、正義の実現された理想国家となると考えた。

- ① A 友愛 B 奴隷 ② A 友愛 B 生産者
③ A 勇気 B 奴隷 ④ A 勇気 B 生産者

問7 プラトンはこの世における知識の獲得を想起説によって説明している。その想起説についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[40]（2009年センター追再試）

- ① 知識の獲得とは、この世を去る際に身体から解放された魂が、この世で起きたことをアイデアを通して思い起こすことである。
② 知識の獲得とは、この世を去る際に身体から解放された魂が、自分は何も知らないという無知を思い起こすことである。
③ 知識の獲得とは、この世に誕生する際に身体に閉じ込められた魂が、不動の動者である神を観想によって思い起こすことである。
④ 知識の獲得とは、この世に誕生する際に身体に閉じ込められた魂が、もともと見知っていたアイデアを思い起こすことである。

問8 プラトンについての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

[41]（2020年センター本試験）

- ① アイデアの認識を確実にするのは、理性ではなく、憧れという欲求であると説き、アイデアへの憧れに衝き動かされた魂を、翼を持った一組の馬と御者が天上に飛翔する姿になぞらえた。
② この世に生まれる前は無知であった人間の魂が、この世に肉体を持って生まれてきた後、感覚に頼ることでアイデアを完全に知ることができるようになると論じた。
③ 感覚的次元に囚われた魂を、暗闇の中で壁に映し出された影を真実と思い込む洞窟内の囚人の姿になぞらえ、感覚的世界からアイデアへと魂を向け変える必要があると説いた。
④ 理想国家のあり方を、理性と欲望が調和した魂の姿と類比的に論じ、そのような国家では、全ての人が哲学を学び優れた市民となることで、統治する者とされる者の関係が消滅すると述べた。

第6問 次の文章を読み下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 18）

アリストテレスによれば、人間を人間たらしめているのは、人間に固有のはたらきである理性であるから、理性の活動を完成することが最高の幸福であり、最高善である。人間の生活は享楽的生活・[42] 的生活・観想的生活に分けられ、それぞれに快樂・名誉・知恵という善が対応する。そのなかでは、真理を探究する観想的生活が、「最善なるもの（理性）がそれに固有な徳を備えてする活動」としてもっとも望ましいものである。

さらに、アリストテレスは『[43]』のなかで、人間の魂を理性的な領域と感情・欲望の領域との二つに分け、それに対応させて、徳を知性的徳と倫理的徳に分類した。知性的徳は観想的生活に即した徳であり、倫理的徳は、習性的徳である。感情・欲望とつながりをもつ日常生活においては、過度と不足の両極端を避けて、その[44]を選ぶことをくり返し、倫理的徳を形成していくことが求められる。アリストテレスは、徳を習得するためには、それを知るだけでは十分ではなく、それがくり返されて習慣となることが必要であると考えたのである。

問1 文章中の空欄 [42] ～ [44] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[42] [① 教育 ② 政治
 [③ 福祉 ④ 蓄財

[43] [① 自然学 ② 靈魂論
 [③ 詩学 ④ ニコマコス倫理学

[44] [① エネルゲイア ② メソテース
 [③ テオーリア ④ プロネーシス

問2 アリストテレスの自然観の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[45]（2018年センター本試験）

- ① 自然界の事物は、質料に形相が与えられることで成り立っており、事物は質料の実現という目的に向かって生成・発展していく。
- ② 自然界の事物は、質料と形相とが結び付いて成り立っており、事物は形相の実現という目的に向かって生成・発展していく。
- ③ 自然界の事物は、質料に形相が与えられることで成り立っており、形相がもつ潜在性によって、偶然的で自由な仕方でも生成・発展していく。
- ④ 自然界の事物は、質料と形相とが結び付いて成り立っており、質料がもつ潜在性によって、偶然的で自由な仕方でも生成・発展していく。

問3 アリストテレスのイデア論批判についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[46]

- ① 本質的真実在はイデアの世界ではなく個物の中に内在する。
- ② 現実世界はイデアの世界ではなく仮象の世界である。
- ③ 本質的真実在の世界にこそイデアは存在する。
- ④ イデアのような本質的真実在はどこにも存在しない

問4 アリストテレスによる「悲劇」を定義した次の文章を読み、その趣旨と合致しないものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[47]

悲劇とは、一定の大きさを備え完結した高貴な行為、の再現であり、快い効果を与える言葉を使用し、しかも作品の部分部分によってそれぞれの媒体を別々に用い、叙述によってではなく行為する人物たちによって行われ、あわれみとおそれを通じて、そのような感情の浄化（カタルシス）を達成するものである。（アリストテレス『詩学』）

- ① 普通の人間が、卑劣さや邪悪さにゆえにではなく、何らかのあやまちのゆえに不幸になるストーリーが悲劇として優れている。
- ② 悪い人が不幸から幸福に転じるストーリーは、人情に訴えるものがなく悲劇に向かない。
- ③ よい人が幸福から不幸に転じるストーリーは、忌まわしいものと感じられるから避けた方がよい。
- ④ すぐれた悲劇のストーリーは、観客におそれとあわれみを感じさせないように配慮しながら、人間の不幸や幸福いずれにも共感できるようなものである。

問5 アリストテレスによる「配分的正義」と「調整的正義」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つずつ選べ。配分的正義については[48]に、調整的正義については[49]に答えよ。（1992年センター本試験）

- ① 理想的な国家を実現するために、国家を構成する三つの階層がそれぞれ自分に与えられた仕事や本分を果たすこと。
- ② 一つの共同体を構成する人々の間で、その能力や業績などに応じて、それにふさわしい名誉や財産を振り当てること。
- ③ それぞれの国家を支配するものが、自らの利益になることをめざして制定した法律に、人々が従うこと。
- ④ 取引や契約その他、人と人との間のあらゆる利害関係において生じた各人の損失と不当な利得を、補償や処罰によって復元すること。
- ⑤ 利益のあくなき追究をその本性とする人間が、自分の財産や権利が損なわれるのを恐れて、互いの間で約束を取り結ぶこと。
- ⑥ 個人の間様々の差異を一切考慮に入れないで、各人の地位や罪科の均等な状態を実現すること。

問6 友愛についてのアリストテレスによる文中の空欄ア，イに入る語の組合せとして最も
適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。[50]

究極的な性質の友愛は，[ア] ひとびとの，すなわち [イ] において類似的なひとびとの
あいだにおける，友愛である。

- ① ア 善き イ 有用性
- ② ア 善き イ 卓越性
- ③ ア 楽しき イ 卓越性
- ④ ア 楽しき イ 有用性

問題は以上です。